

〈模倣〉という遊び

横路明夫

台湾の日本語学科に所属してかなりの月日になるが、会話の授業などをしていると、何年かに一人の割りりで、日本人になりたいと言う学生に出会う。もちろん、日本人教師へのリップサービスという面も多分にあるだろうし、また、どうせやるなら徹底的にやりたいという決意表明でもあるだろう。だが、そこには日本人の「ふり」をするという遊び感覚が含まれているように私には思える。戦前の被植民地時代、強制されて日本語を学ぶという状況がどのようなものであったかは、戦後生まれの、しかも専門外の私にとって、想像することすら難しいし、また、個人差ももちろんあるので一概には言えないけれども、それをアイデンティティの問題として重く捉える一方、今の学生と同様に、自分に与えられたオプシジョンの一つとして「日本語」を捉えていた一面もあるのではないかという気がしてならない。もちろん、日本が台湾を政治的、文化的に抑圧したという事実は否定すべくもないが、そういう台湾人の、いい意味でのしたたかさを私は台湾での生活で感じてきたように思う。

1. 『台湾万葉集』

それゆえに、丸山隆司氏が取り上げた短歌作成も、日本語が拘束であると同時に広がりでもあるというような感覚があり、それが例えば短歌作成という形で表出したのではないか、そのような「ふり」、遊びとしての一面を持っていたため、『台湾万葉集』が編纂されるというようなことが起こり得たのではないか（おれ達は日本人にもなれるんだよ、というような）と思えてしまう。少々概略的な話になるが、詩と遊びについては、ヨハン・ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』において次のような興味深い指摘を行っている。

（ここで詩と遊びの関係をとり上げるのは）いまや高度に組織化されてしまった社会形態のなかでは、宗教、科学、法律、戦争、政治が、明らかにそれらが生まれ育った初期の段階では十分に保っていた遊びとの接触を、次第に失いつつあるが、これに対し詩をつくるということはこれも初めは遊びの領域に生まれたものでありながら、いまなお依然としてそ

の領域の内部に踏みとどまっているからである。詩作（ポイエーシス）とは一つの遊びの機能なのである。それは精神の遊びの空間で行われる。精神が自らのために創った固有の世界で営まれている。そこでは物事は「日常生活」のなかでとは異なった相貌を帯び、ものとのとが論理や因果律とは別の絆によって結び合わされる。もし、真面目ということをも、目覚めている生命の言葉のなかにはつきり断定的に表されるもの、というふうにとらえるならば、詩はとうてい完全な意味で真面目なものと言うことはできない。それは真面目の彼岸に立っている。子供、動物、未開人、予言者が属している根源的・原始的な層のなかにあり、夢、魅惑、恍惚、笑いの領域の中にある。¹

ホイジンガは「高度に組織化されてしまった社会形態のなかでは、宗教、科学、法律、戦争、政治が、明らかにそれらが生まれ育った初期の段階では十分に保っていた遊びとの接触を、次第に失いつつあるが、これに対し詩をつくるということはこれも初めは遊びの領域に生まれたものでありながら、いまなお依然としてその領域の内部に踏みとどまっている」と述べているが、まさにそのようなものとして『台湾万葉集』はあるのではなからうか。私は台湾の短歌とは、本来の「遊び」の領域に止まり、〈ミミクリ〉²の遊びの要素を濃厚に持ったものではないかと思わずにはいられないのである。あくまでも「遊び」であるという余裕を失わずに、

短歌あるいは日本人を模倣する「遊び」として、台湾人の短歌作成はあったのではなからうか。

文芸が秘儀化され、いつの間にか厳肅なものになっていきがちな日本とは違い、ホイジンガが言うところの「真面目の彼岸」に立つ言葉として、あるいは、台湾人の精神の余裕として、短歌作成を捉えたいという気持ちを私は持っている。

2. 教育制度

揚妻祐樹氏が考察対象とされた教育制度に関わる台湾の日本語文学作品として、周金波の『ものさし』の誕生³がある。周金波は、いわゆる「皇民作家」としてしばしば批判されてきた作家であるが、例えば、この『ものさし』の誕生³などは、親日作家というレッテルでは計れない微妙さを有している。内容を簡単に言えば、台湾人の子供が行く「公学校」から日本人の子供が行く「小学校」に編入した主人公が、「本当の日本人」としての価値観（ものさし）を、建前としては同じ日本人でありながら、台湾的身体に接木されるように後から与えられるという「アイロニー」を表現しようとしている、とまとめることができるだろう。この作品には、自分に内面化した「日本」からのまなざしにより抑圧され、硬直する主人公の姿（身体）が描かれている。周金波は、植民地台湾にあつて、積極的に日本人であろうとした作家であつた。そ

の周金波にとっても、本島／内地（台湾／日本）という見えない垣根を越えるのは容易なことではなかったのである。「国語」として日本語を学習させることの暴力性を小森陽一はかつて次のように指摘した。

その後、言語的同化政策がより徹底されていく中、「日本」によって植民地化された韓国・朝鮮の人々は、「正統」な「大日本帝国臣民」になるために、「国体」と自らを結びつける。「国語」としての「日本語」を修得しなければならなくなった。しかし、本書で繰り返し論じたように「国語」という観念は、「日本」が近代国民国家としての形をとってから、常に未来に投企された、「いまだかつてなく」「いまもない」という、常に空白としてしか与えられていなかったのである。そうであればこそ、空白の観念としての「国語」を通じて、「臣民」（国民）になるという道筋は、過剰なまでの韓国・朝鮮的「自己」の否定と、観念としての「あるべき日本人」にむけての永久自己変革とならざるをえない。ゴールはどこにも設定されていないのである。このことが、「国語」を中心とした同化政策の中における、最も暴力性の強い局面だったはずである。なぜなら、当の「日本人」でさえも、どのような言語が、「正統」で「正しく」「美しい」「国語」であるかを明示することはできないからだ。³（小森陽一『ゆらぎ』の日本文学『p.288』）

同じく周金波の「フアンの手紙」には、このような、「言葉」

としての「理想」、「あるべき日本人」に向けて空回りする台湾人のありようが描かれている。自分の身体に染み付いた言葉とは別の言葉を「国語」として強制されることは、翻って自らの身体がどこに属しているのかという問題を不可避的に招き寄せるのである。

ちなみに、この「正しく」「美しい」「国語」の強制については、現在の日本語教育においても、日本人なら許容される間違いが、外国人の場合、許されないという転倒がある。教える日本人が「本当の日本語」は自分達のものだと思っている限り、つまり私たちが本家意識がある限り、「正しい」日本語は押し付けられ続けるのかもしれない。

3. 台湾の日本語文学

横路啓子氏は台湾のプロレタリア文学——楊達の「新聞配達夫」と呂赫若の「牛車」——を取り上げ、前者については、正統派プロレタリア文学ではあるが、それが日本への編入を目指す借物のモチーフになってしまっているというねじれを指摘し、後者については、プロレタリアから乖離した知識人の視線、ブルジョアの視線を指摘しつつも、日本を中心化する思考を問い直すテクストになり得ていると評価している。これはおそらく、私の問題意識に引き付けて言えば、プロレタリア文学の「模倣」が単に真似に

なるかパロディになり得るか、という問題に置き換えることができるだろう。そしてこの問題において、氏の言う「台湾の知識人が台湾の農民や労働者を日本語で描く」ということは、誰を対象に、何のために書くことになるか」という問いは重要な意味を孕むことになる。作品が台湾という土地に土着しているか否か（それが台湾産の、台湾のための文学であることを意識しているかどうか）によってテクストの位相が異なってくるからである。

例えば、龍瑛宗の「パパイヤのある街」には次のような一節がある。

やがて墓の邊りに生ひ茂つた雑草や、樹々が、その執拗な根を下ろして、地底に横はつた俺の顔に、胸に、手に足に、しつかりと絡みついて養分を吸ひながら地上に花を咲せるのであらう。朗らかに晴れ渡つた春の大空の下に可憐な花がユラユラと揺れながら、行人たちの目を飲ばせることだらう。これはかなりの確率で梶井基次郎の「桜の樹の下には」の次の部分と影響関係を持つている。

馬のやうな屍体、犬猫のやうな屍体、そして人間のやうな屍体、屍体はみな腐爛して蛆が湧き、堪らなく臭い。それでゐて水晶のやうな液をたらたらとたらしめてある。桜の根は貪婪な蛸のやうに、それを抱きかかへ、いそぎんちやくの食糸のやうな毛根を聚めて、その液体を吸つてゐる。

だが、これを「日本文学」的な装いと見るか、「桜の樹の下には」

という日本文学のパロディと見るかによって、テクストの表情は大きく変わることになる。そしてそれは、龍瑛宗という台湾人日本文学作家の文学的姿勢と合わせて問われなければならない問題だろう。私は以前、周金波について、次のように書いたことがある。

周金波が日本人であろうとした人であることは、「盛んに皇民化を強調し、『内台融和』を仕事だと思つていました」という、後年の彼自身の発言からしても疑い得ない。しかし、いや、それゆえにこそ、彼の作品の重要性は看過されるべきではなからう。意識的な抗日の言説から見えてこないだろう問題、つまり、(どんなに積極的に日本人であることを受け容れようとしても)ある歴史性に貫かれた人間がある歴史性に貫かれた人間に(つまり、台湾人が日本人に)なろうとすることに必然的に(不可避免的に)含まれる問題性がそこでは明らかになっているからである。ゆえに、皇民作家であるかないかを超えて、作品が示す彼の(精神)の軌跡(彷徨)は辿られねばならないように思われる。⁴

周金波は日本人であろうとしながらも、台湾人としての自らの身体に執拗にこだわった作家である。台湾を単に被害者として位置づけるのではなく(これもまた日本の中心化である)、台湾人が自らの目、自らの身体によって(台湾を中心にしたまなざしによって)「日本」を(そして「日本語」を)どう捉えたかを問う

作業が、今後に必要なものではなからうか。

注

- 1 ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』（中公文庫 1973.8）pp. 250-251
- 2 ホイジンガの影響を受けたロジエ・カイヨワは遊びを（アゴーン）（競争）・（アレア）（偶然）・（ミミクリー）（模倣）・（イリンクス）（眩暈）の4つに分けている。（R. カイヨワ『遊びと人間』岩波書店 1970.10）
- 3 小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』（NHKブックス 1998.9）p. 288
- 4 拙論「周金波論——身体をめぐる物語——」（『日本語日本文学』2004.7）
（よこじあきお・輔仁大学准教授）

第八十五号 目次 二〇一一年 十一月

『日葡辞書』における「たいせつ（大切）」の類義語について	漆崎 正人
.....
水哉子卷之上譯注（その一）	名畑 嘉則
日韓におけるオノマトペ運用の諸相	阿部 友加里